

令和7年度

感染症危機管理リーダーシップ研修【長期】

寄稿 危機管理・運営局 企画調整部 上級研究員 佐藤 瞳



4月～5月

対面研修

地域の感染症危機においてリーダーシップを発揮する人材に必要な知識の深い理解・定着を促すことを目的として実施

求められる リーダーシップとは？

感染症危機時においてリーダーシップが発揮できるよう、平時から常に危機時を見据えて研鑽を積むことが重要であり、こうした認識・行動が感染症危機管理につながることを講師から共有されました。参加者がこれまで出会った「なりたいリーダー」と「なりたくないリーダー」を思い浮かべ、それぞれの特徴について意見を交わし、感染症危機時のリーダーシップのあり方について議論しました。



机上演習

対面研修の学習を踏まえ、感染症危機時に実際にどのように実務に活かされるか学ぶことを目的として実施

どう判断し、どう動くか シナリオを元に考える感染症危機対応

参加者は、「A県A保健所・感染症対策担当課長」という立場で、アジア地域で発生した急性呼吸器感染症の感染拡大を防ぐことを想定した机上演習に臨みました。シナリオは、限られた情報、時間、リソースの中で、優先順位付けの判断、関係機関との連携、住民への情報提供など、次々と意思決定が求められる構成でした。行政の職員と医療従事者が合同で参加したことにより、情報公開をめぐる立場の違いが明らかになり、活発な議論が交わされました。



講師：浦西 由美 先生
(徳島県南部総合県民局保健福祉環境部
＜美波＞副部長兼美波保健所次長)

JIHS では、厚生労働省委託事業として、公衆衛生行政、医療提供体制、感染症疫学や臨床等に関する専門的な知見や経験を有する既存の多様な職種の感染症専門人材に対し、地域における将来の感染症危機への対応においてリーダーシップを発揮する人材として、感染症危機管理に必要な多様かつ分野横断的な知識やスキルの修得や維持・向上を図ることを目的とした研修を実施しています。今回は、令和7年度4月から開始された長期研修の4月・5月・6月の様子を紹介します。

Web サイトは
こちら



外部講義

外部講師による感染症危機の事例やリーダーシップに関する講義とグループディスカッションを実施

「公衆衛生総論」

長年にわたる国内外での豊富なご経験を持つ岡部先生から、公衆衛生の基礎、実地疫学専門家養成コース、急性呼吸器感染症サーベイランスなど、感染症対策について幅広くご講義いただきました。講義では、公衆衛生学の本質を表現した「木だけではなく、葉も枝も見て木を見て森を見る」という言葉とともに、日々の業務において細部に注力しながらも常に全体を俯瞰し、個々の事象と全体の関連性を捉えることの重要性が語られました。また、感染症法前文に掲げられた「人権を尊重しつつ」という基本理念について、ハンセン病やエイズ等の感染症患者等への差別や偏見があった過去の事例から得られた教訓を通じて、感染症対策における人権への配慮の不変の重要性が強調されました。

講師：岡部 信彦 先生
(神奈川県川崎市健康安全研究所参与)

実践研修

感染症危機管理に関わる各関連機関の役割や業務を知り、感染症危機時における分野横断的な調整能力を身につけることを目的として実施

実践研修 On-the-Job Training

各実践研修機関において、1か月から数か月ずつ、合計1年間の実践研修を行います。4月から7月までは、国立健康危機管理研究機構 国立感染症研究所にて研修を実施しています。写真は、研修の一環として行われた篠崎夏歩先生による「高病原性鳥インフルエンザ (HPAI) サーベイランス」の講義風景です。講師と研修生の間で活発な質疑が交わされました。



実施研修機関

- 厚生労働省（検疫所含む）
- 内閣感染症危機管理統括庁
- JIHS 国立国際医療センター
- JIHS 国立感染症研究所
- 所属自治体の県庁、保健所、地方衛生研究所



6月

実践研修

感染症危機管理に関わる各関連機関の役割や業務を知り、感染症危機時における分野横断的な調整能力を身につけることを目的として実施

研修生の研修記録

6月	2日	感染症アウトブレイク調査の基礎、要約文献検索	
	3日	要約文献読み込み、今月の研修目的等確認・リスク評価について、EBSについて説明、サーベイランスレビュー	
	4日	weekly セミナー「研究の進め方」土橋先生	
	5日	サーベイランスデータまとめ発表、リスク評価まとめ準備	
	9日	リスク評価まとめ準備、AFP 厚労科研班会議参加、国外 EBS 準備	
	10日	国外 EBS 発表、インドネシアのサーベイランス (JICA)、サーベイランスレビュー	
	11日	ウィークリースタディ、リスク評価ミニレク	
	12日	鳥インフルリスク評価予演会、リスク評価まとめ準備、FETP26 期長期研究中間発表聴講	
	13日	リスク評価まとめ準備、数理セミナー	
	16日	FETP26 期中間報告会	
	17日	3分チャレンジ打ち合わせ、リスク評価まとめ準備、サーベイランスレビュー (3分チャレンジ実施)	
	18日	ウィークリーセミナー、EHEC 事前打ち合わせ、リスク評価中間、NCGM 事前面接	
	19日	リスク評価まとめ準備	
	20日	リサーチミーティング、リスク評価まとめ準備、EHEC 打ち合わせ	
	23日	リスク評価まとめ準備、J-speed 講義	
	24日	リスク評価最終打ち合わせ	
	25日	厚労省食中毒研修参加	
	26日	フィードバック会、有事の組織体制阿南先生	
	27日	リスク評価準備、新型インフルエンザ等対策推進会議傍聴	
	30日	リスク評価まとめ発表、感染症意見交換会	

- * EBS : Event-based surveillance
- * AFP : acute flaccid paralysis (急性弛緩性麻痺)
- * EHEC : enterohemorrhagic Escherichia coli (腸管出血性大腸菌)
- * FETP : Field Epidemiology Training Program (実地疫学専門家養成コース)

研修生所感より

意見交換ができる環境・関係性づくりは身近な単位から始められる



自治体と実習先では組織としての役割や体制等、異なる部分が多くあります。そのまま所属自治体に落とし込むことは難しいですが、本当の意味で意見交換ができる環境・関係性づくりは身近な単位から始められることがあると気付くことができました。具体的に実践できるのはまだ少し先になりますが、折々で行っている所属自治体への研修報告の中で触れる等により、現状でもやれることをやっていきたいです。

応用疫学研究センター発表会【日時：6月30日 会場：国立感染症研究所】

応用疫学研究センターの八幡裕一郎先生、島田智恵先生のご指導のもと、研修生はそれぞれエムポックスとデング熱のリスク評価に取り組み、6月30日の発表会で成果を発表しました。発表会にはオンラインで応用疫学研究センター長の砂川富正先生もご参加くださり、リスク評価の考え方や要点についてご助言をいただきました。



令和7年度研修生



講師：八幡 裕一郎 先生（応用疫学研究センター）
と令和7年度研修生



講師：島田 智恵 先生
（応用疫学研究センター）

外部講義

外部講師による感染症危機の事例やリーダーシップに関する講義とグループディスカッションを実施



講師：阿南 英明 先生
(地方独立行政法人神奈川県立
病院機構 理事長)



令和7年度研修生と阿南先生

「有事の組織管理」【日時：6月26日 会場：AP 東新宿】

「有事の組織管理」をテーマとした外部講義を開催しました。講師の阿南先生から、「ダイヤモンド・プリンセス号」において新型コロナウイルス感染症の集団感染が発生した時、DMAT(災害派遣医療チーム)の指揮官(※厚生労働省臨時検疫官の発令を受けた上での対応)として医療支援を統括された経験や、神奈川県において緊急医療体制「神奈川モデル」の構築、病床確保に関する県と病院の協定締結、スコアによる適正な入院基準の策定に尽力された経験、また、各ステークホルダーと丁寧にコミュニケーションをとることの重要性について語られました。

研修生所感より

「全体最適」を見据えたリーダーシップ

「どのようにして課題を設定し、戦略を立て、戦術へと落とし込むのか」という全体的な流れと考え方を学ぶことができました。特に印象的だったのは、現状を俯瞰し、先を見据えた課題設定の視点です。ダイヤモンド・プリンセス号でのアウトブレイクや地域でのパンデミックといった具体的な事例を通じ、課題を構造化し、ベクトル分解していく思考法を体感することができました。また、戦略・戦術をチームで検討し、共有していく体制の在り方についても示唆があり、自組織における体制構築のヒントとなりました。「すべてを解決するのではなく、全体最適を図る」という姿勢が印象的でした。さらに心に残ったのは、「論理で納得し、感情で動く」という言葉です。感情的な抵抗がある場面においても、ステークホルダーと徹底的に対話を重ね、納得と共感を得る努力をされていた姿勢に感銘を受けました。ステークホルダーとの丁寧なコミュニケーションこそが、合意形成と現場の推進力につながることを改めて実感しました。



研修生・参加者と阿南先生の集合写真